

プレゼンテーションⅣ 「復活節—入信の秘跡直後の導き」

石井祥裕 (日本カトリック典礼委員会委員)

私は「入信の秘跡直後の導き」、すなわちミュスタゴギアに関心をもって研究を続けてきたこともあり、今回は復活節を担当します。『典礼暦年に関する一般原則および一般ローマ暦』19 ページから、現行の復活節の概要、改定の理由、改定時の反省も含め、歴史と刷新について確認したいと思います。

一つの祝日としての復活祭後の 50 日間

復活節の流れについては十分理解されていると思いますが、この季節は、ミサの聖書朗読の構成、入信の秘跡直後の導きの季節ということ、また聖書朗読に関連する主日ごとの叙唱、祈願、歌の内容にその特徴が示されるでしょう。まず、この季節の概念から確認したいと思います。「復活の主日から聖霊降臨の主日に至るまでの 50 日間は、一つの祝日として、また、より適切には『大いなる主日』として、歓喜に満ちて祝われる。『アレルヤ』がとくに歌われるのは、この季節である」(『典礼暦年と典礼暦に関する一般原則』22)。聖霊降臨であるペンテコステは 50 日間をも意味し、同時に 50 日目をも意味したという知識があれば、復活の主日から聖霊降臨の主日までの 50 日間は、「一つの祝日」として捉えられていることも納得できるでしょう。ここで興味深いことは、50 日間は「一つの祝日」“*unus dies festus*” だということです。その注にある聖アタナシウスの『書簡』にもそうした理解があったように、この点を今回あらためて見直したいと思います。

50 日間を一つの祝日、主日として一定の期間に祝う伝統は、すでに古代の 2～3 世紀から、たとえばテルトゥリアヌスの言葉にも、キプリアヌスの文献にも出てきます。4 世紀のアタナシウス、バシレイオス、アンブロシウスにも、その理解は受け継がれていました。ふつう常識的には、50 日間を一つの祝日とは理解しませんから、この点をとくに問いかけて、信者に復活節の意味を解き明かすきっかけにはいかがでしょうか。

この季節にはとくに「アレルヤ」が歌われ、断

食もひざまずくこともないため、回心の季節との対比で喜びを強調します。復活祭後の 8 日間と、8 日目である第 2 主日、また 50 日間の締めくくりである聖霊降臨の日の最後のあいさつは、「行きましょう、主の平和のうちに、アレルヤ」、「神に感謝、アレルヤ」となっています。このように「アレルヤ」をとくに歌う、唱える、という季節の特色も主日のミサに表れています。また、さらに明確に表れているのは「教会の祈り」です。この季節の交唱の一つひとつで「アレルヤ」が唱えられており、伝統が如実に表れています。

50 日間が一つの主日だという理解は、「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」23 番とも関連しています。この内容は私たちにとってごく当然のことですが、トリエント公会議後から第 2 バチカン公会議までの暦では、復活節第 2、第 3、第 4、第 5 主日はそれぞれ “*post pascha*” (復活祭後の主日たち) と呼ばれていました。そうした位置づけであったのに対し、現行の暦では “*dominicae Paschae*” (復活の主日たち) と名称が変わっています。全体で「復活の主日たち」なので、「復活節第 2 主日」、「復活節第 3 主日」はいわば「復活の主日 2」、「復活の主日 3」を意味しています。このように、50 日間全体を一つの主日として祝うことが暦に表されています。また、改定前の聖霊降臨の主日は 8 日間の祈りの期間 (*octava*) を伴う独立した大きな祝いだったのに対して、現行では「この 50 日間の聖節は、聖霊降臨の主日をもって終了する」(『典礼暦年と典礼暦に関する一般原則』23) とされています。このように、暦の改定によって中世期からの復活節のあり方を反省し、4 世紀ごろまでの古代で祝われていた 50 日間という原型に立ち返ろうとしたことが理解できます。

「50 日間」には、ユダヤ暦での七週の祭り、7 週で祝うという伝統が、その背景にあります。復活節の 50 日間は復活の主日から聖霊降臨の主日まで、主日を数えると 8 主日です。8 つの主日は、数字上の意味でも完成性をもち、主の復活の記念だけでなく、将来の私たちの記念と、再臨へ

の待望を表す礼拝という意味をも有します。

50 日目の強調と 50 日間の崩れ

4 世紀ごろまでは、このような 50 日間としてのペンテコステの周期が保たれていたといえるでしょう。ところが、初代教会とそれ以降の教会の姿が交差する大きな転換期であったこの 4 世紀に、しだいに「50 日間」から「50 日目」の祝いへと比重が移行していくのです。地域差はありますが、東方では主の昇天と聖霊降臨を合わせて 50 日目に祝うこともあったようです。やがて、使徒言行録が述べる五旬祭の聖霊降臨ということに基づいて、主の復活の 50 日目に聖霊降臨を祝うことが 4 世紀の終わりごろから見られるようになります。同様に、使徒言行録に基づいて 40 日目に主の昇天を祝うようになり、40 日目の主の昇天、50 日目の聖霊降臨、という祝い方が 4 世紀終わりから 5 世紀にかけて広まりました。今回取り上げられた「降誕」も「公現」も 4 世紀終わりごろに広がったように、復活祭のほか、降誕、公現、昇天、聖霊降臨、という 4 つの主要な祝日がこのころに大きく際立つようになったのです。

しかしながら、主の昇天と聖霊降臨がこのように強調されて祝われるようになったことは、元来の復活の「50 日間」の解体の始まりであるともいえます。聖霊降臨の祭日ですから、その前晩から始まり、徹夜の祈りをもって過ごし、8 日間祝いを続けることとなります。主の昇天もその前晩をもって祝い、11 世紀ごろからはやはり 8 日間の祝いをもつようになりました。そして、昇天の 8 日間をもって聖霊降臨の準備にするというような祝い方が習慣となるのです。昇天と聖霊降臨のこのような強調の結果、復活節はあたかも主の昇天の祭日で締めくくられ、その次からは復活祭の次にくる大祭である聖霊降臨祭の準備の期間と捉えられるようになります。復活のろうそくを主の昇天の日に消すというような現行典礼暦の前までにあった慣習も、このあたりから生まれてきます。

ちなみに、第 2 バチカン公会議以前、聖霊降臨の主日の後の水曜日、金曜日、土曜日には、今ではしまりなじみのないものですが「四季の齋日」(Quattuor Tempora) というローマ教会独特の慣習があり、断食が行われました。水曜日と金曜日には古来、断食をする習慣があったことも影響しているのでしょう。この四季の齋日は、もとも

とは収穫祭と結びついた春夏秋冬の四季を表す習慣です。それが徐々に、春は四旬節、夏は聖霊降臨、秋は十字架称賛、冬は待降節と組み合わせられていきました。聖霊降臨はこのような四季の季節感とも結びついて、一年の典礼暦における大きな節目となっていたのです。

復活祭後の 8 日間

話が少々前後しますが、4 世紀の過程では復活祭後の 8 日間 (octava) も独自の姿で際立つようになってきました。復活祭後の 8 日間は、洗礼を受けた人のための集中的な秘跡教育の時期とされていたのです。現在、復活節全体が入信の秘跡直後の導きの期間というように意義づけられていますが、その側面をはっきりもっていたのは復活の 8 日間でした。つい最近まで復活節第 2 主日には「白衣の主日」という副称があったように、この 8 日間は「白衣の 8 日間」ともいわれていました。洗礼を受けた人が白衣を着続け、教話を受け続けるという意味でした。白衣を着続ける日は復活節第 2 主日で終わりますが、その前の 1 週間が白衣というシンボルで記憶されていたことから、その最後の日が「白衣の主日」といわれたようです。

第 2 バチカン公会議前後に見る復活節の聖書朗読箇所

このように 4 世紀を通して、復活の 8 日間の強調、主の昇天、とくに聖霊降臨祭の強調により、初期の復活の 50 日間の全体像はあまりはっきりしなくなっていくます。そのような状態が定着したローマ典礼暦の長い伝統となった姿を、1962 年の *Missale Romanum* から見てみましょう。配布資料にある、公会議前と現行の復活節のミサの聖書朗読をご参照ください。

この 1962 年の *Missale Romanum* の復活節の朗読箇所は、中世初期からの長い伝統の集大成ともいえます。現行の聖書朗読の配分と細かく見比べると、いろいろと興味深い点が見えてきます。第 1 朗読は聖霊降臨の週までは使徒言行録が含まれ、福音書にはヨハネの福音が多く選ばれている点など、全体的な特徴は現行のものとは大きく変わってはいません。しかし、現行の 3 年周期の朗読配分は、古代の伝統を受け継ぎつつも、全体の配分としては教会の二千年の歴史においてまったく新しいものだといえます。復活節を 50 日間

という全体で捉えることで初代教会の実践に立ち返るという原則を含め、具体的な内容を見ると、典礼暦の改定の方針は正しかったといえるのではないかと思います。

改定前の聖書朗読の第1朗読は、使徒言行録または使徒の手紙でした。現在は3つの朗読があるという点も異なりますが、通常、旧約聖書から選ばれている第1朗読は、この季節には使徒言行録が読まれます。どの年も、復活節第2主日と第3主日の福音朗読では、復活したキリストが現れる、復活の顕現伝承物語が読まれます。最初にお話した復活節全体を復活の主日と見なす考えが、第2主日、第3主日に復活の主が現れる箇所が当てられていることに表されているといえます。第4主日、第5主日、第6主日の福音朗読にはヨハネ福音書が選ばれています。第4主日はご存じのようによい牧者の箇所、第5主日、第6主日は惜別の折に主が弟子に説いた、聖霊の派遣の約束が読まれます。復活の主日から40日目の主の昇天、日本では復活節の第7主日には、共観福音書からそれぞれの結びの部分が選ばれています。聖霊降臨の主日には、使徒言行録による五旬祭での聖霊降臨の出来事がどの年も第1朗読で読まれます。改定前の第1朗読も現行と同じ使徒言行録2・1-11でしたが、福音朗読には特徴が表れます。改定前はヨハネ福音書14・23-31の、聖霊を遣わすという約束の箇所だったのが、現行の聖霊降臨の主日（A年用・毎年使うこともできる基本的な配分）では、ヨハネ20・19-23の、イエスが復活した日の夕方の出来事になっています。この箇所はヨハネ福音書における聖霊授与（いわば聖霊降臨）の箇所なのですが、いってみれば復活の日の出来事です。ですから、復活後50日目の主日、すなわち聖霊降臨の主日に、復活の日の出来事として聖霊が遣わされることをヨハネの福音書によって聞くのです。この箇所が聖霊降臨の主日の基本的な福音朗読箇所とされているというところに、復活節の50日間全体が実は一日の復活の主日なのだという根本理解が示されているといえると思います。

入信の秘跡直後の導き

次に、復活の8日間に、古代教会で新しく洗礼を受けた人々の教育期間に行われたミュスタゴギア、つまり入信直後の導きを少し詳しく見たいと

思います。配布資料と『成人のキリスト教入信式』の「緒言」もご参照ください。まず、『成人のキリスト教入信式』の「緒言」8番に、「入信の秘跡直後の導き」の原語である“mystagogia”が記されています。

先ほども述べましたが、4世紀には洗礼式で白衣を着せるシンボリックな習慣が東西の教会で広がっていたため、この8日間は「白衣の週」と呼ばれていました。初代教会のころにも、洗礼を受けて初めて教示される秘義、すなわち洗礼やエウカリスティアの意味を教える習慣はすでにあつたようです。4世紀終わりの文献には、エルサレムのキュリロスやアンブロシウス、ヨアンネス・クリュズストモス、モプスエスティアのテオドロスなどのミュスタゴギアの記録が残されています。その後は幼児洗礼が中心になりますが、4世紀ごろまでは成人が、各自の宗教から改宗してキリスト者になるという意味での入信の実践が主でした。

彼らをキリスト者として育てるために、とくに洗礼直前の準備期間としての四旬節に行われた多少とも教理的な教えの伝授と関連づけて、復活祭後には入信直後に必要な信仰教育も同じように熱心に行われていたのです。

ミュスタゴギアには先ほど述べたような教父たちの記録が残されていますが、実際に復活徹夜祭での洗礼式後、初めの1週間の間に行われていた教えは、キュリオスの「秘義教話」¹⁾とアンブロシウスの『デ・サクラメンティス』²⁾に見られるものです。キュリオスのものには5つの講話があり、題目のようにそれぞれ前提となる聖書朗読箇所がその前に読まれます。アンブロシウスのほうは全部で6つありますが、日を変えて教えられていたようです。キュリオスのものの構造を見ると、「秘義教話」というものがどういうものかが見えてきます。当時の司教は、洗礼の秘跡を受け、聖体を受け、信者としての歩みを始めた人々に、受けた秘跡を思い起こさせながら説明していました。まず洗礼式の中でのこと、たとえば悪霊追放の儀式が説明され、聖体の説明（第4講話）では、なぜパンとぶどう酒がキリストの聖体なのかという説明がされ、さらにエウカリスティアの祭儀の流れ、聖体拝領までが説明されます。こうした教えは今なお大切なものだといえます。当時の教えは、秘義の解説ではあっても抽象的に行われるのではなく、儀式の流れに沿って具体的に説明されていま

した。そしてその説明方法は、聖書の中にある予型や、キリストが行われた根源的な出来事を具体的に取り上げて説明するというものでした。旧約と新約を対照させる解釈の延長線上に旧約、新約、キリストの出来事、そして私たちが今体験する出来事を関連づけて教えられていました。とくにアンブロシウスは、その儀式で告げられる言葉、唱えられる祈りの内容を取り上げ、そこに表されている救済史の理解を説き明かして教えています。そして祭儀の中で祈られたことを思い出し、そのとおりに生活しなさいと教えます（つまり当時の典礼は民衆が理解できる言語で行われていたということが分かります）。

具体的な秘義教話の内容については、直接原典の邦訳にあたってください。他の古典に比べて分かりやすいものであることが実感できます。ここでは、秘義教話の精神について確認しておきたいと思います。キュリロスの講話も、アンブロシウスの講話も、秘義教話は入信の秘跡の後に、洗礼を思い起こすよう導きながら行われました。また、教えているのはキュリロス、またアンブロシウスといった司教個人ではなく、その出来事の中で働かれた神の意志であると考えられています。ここには聖霊という言葉は出てきませんが、聖霊という教師を受けてようやく教えられるようになるということです。つまり、何よりも神ご自身が、秘跡の儀式、ことばとしるしを通して語りかけられている出来事をまず体験しなければ、教えを受けるのにふさわしくないという考えがあることが分かります。まず何よりもキリストの現存があり、それに結ばれていることから初めて、人間が行う教話を受けることができるという厳粛な考えなのです。神の現存、キリストの現存、聖霊の働きに対する意識の上にある入信直後の導きを考えると、復活節のミュスタゴギアの教えの根底には、この期間、つまり復活祭後の8日間にはキリストの現存があり、聖霊の働きがあるということを生き生きと感じながら展開するという考えがあることが分かります。もちろん実際には、教会によって教話の形式はさまざまだったと思われます。新しく入信した信者がより分けられて講話を受ける場合や、ほかの信者とともに、それぞれの入信を思い起こしながら講話を受ける場合もあったようです。クリュズトモスの説教集も残されていますが³⁾、これは新しい信者に限定せず、信者の生涯養成的

な意味も合わせて、ほかの信者とともに行われていたようです。

現在の教会も、このように4世紀初めごろまでに行われていたミュスタゴギアをの精神を生かそうとしています。『成人のキリスト教入信式』の「緒言」8番によると、入信の秘跡後8日間に行われていたミュスタゴギアを、復活祭後の8日間に限らずに復活節全体の理念にしようとしています。聖書朗読の配分では、A年の朗読箇所が入信直後の導きのための典型だといわれています。第2朗読ではペトロによる第一の手紙が読まれますが、この手紙自体、新しく洗礼を受けた人への説教から成ったといわれるものです。そして、現在のB年、C年の朗読配分もまた、すべての信者に向けて入信の秘跡の意味を解き明かすものとなっています。

20世紀における過越秘義への回帰

現在の典礼暦年の神学にとって、大きな影響を与えた神学者にドイツのO・カーゼルという人がいます。資料には、その著書『秘儀と秘義』の中で、今回の研修テーマに関連するおもな箇所を抜粋しました。その中心は、次のような文章です。「したがって、典礼暦年全体は単一の秘義である。この秘義の頂点は、最高の秘義とも言うべき『過越秘義』であって、これは毎日曜日ある意味で詳細に現在化される」⁴⁾。

典礼暦年全体の中心に過越秘義があるという考えは、19世紀以来のベネディクト会での典礼生活の見直しの中で再確認され、20世紀になってカーゼルなどにより神学的に深められ、それが先の典礼刷新の大きな原動力になりました。

ここから、典礼暦年全体が単一の秘義であり、ましてや復活節はキリストの過越という統一的なあるいは一つの秘義を祝う、一つの祝日、大いなる主日であることが見直されていったのです。

すべての信者と共同体へのミュスタゴギアへ

ここまで復活節の歴史、現在の復活節の考え方の具体化である聖書朗読配分、そして復活節の特徴的な実践としての入信直後の導き（ミュスタゴギア）の古典的な姿について見てきました。

現在の復活節の構成は、4世紀以後の発展（復活の8日間、主の昇天、聖霊降臨の主日などの強調）を意義あるもの、聖書的基礎のあるものとし

て受け継ぎつつ、やはり全体を一つの祝日としての 50 日間というコンセプトで包括している点が重要です。

これらの意味合いは先に見たように聖書朗読配分の具体的内容、それから、閉祭のあいさつでの「アレルヤ」の付加（復活の 8 日間、聖霊降臨）——これらは忘れられやすいので、よく注意する必要があります——それから続唱を歌うこと（復活の主日、復活節第 2 主日[任意]、聖霊降臨の主日）など（ついadenaながら、復活のろうそくは聖霊降臨の主日のミサの後に消すことも）を通して祭儀的に表現されます。この意味をよく伝えることが必要です。そのようなことも、聖書朗読や説教と並んで、重要なミュスタゴギアです。

『成人のキリスト教入信式』では、ミュスタゴギアは「入信直後の導き」という側面で言及されていますが、実際には入信した人すべて、すなわち信者全体にとって普遍的に意味をもつことです。しかも、それは特別な教話の形でだけでなく、典礼祭儀におけることばとするしはすべてミュスタゴギア的な役割をもっています（『典礼憲章』33-35 参照）。

このプレゼンテーションで確認したことは、現在の復活節の聖書朗読配分と祈願がどのような季節理解のもとで構成されているか、そしてそれを信者一般への信仰の神秘への導きとして、普遍化し、充実させていくためのヒントを古典から学ぶことでした。

教会がなすべきミュスタゴギア、信仰の神秘・キリストの神秘への導きを、このような季節の設定と聖書朗読、祈願、歌によって総合的に実行することを、現代の教会は自らの実践課題として明示しています。それは、入信者はもちろん、洗礼を受けた信者一般、さらにそうした個人だけでなく、ひとつの教会共同体がどうあるべきかについてのメッセージを含んでいます。聖書朗読の配分の研究を深め、また復活節の各主日の祈願（古典的な祈願・試用の祈願とも）を内容もよりいっそうくむことで、これらはますます力強い宣教司牧の糧となっていくでしょう。

毎年移動があるにせよ、だいたいにおいて 4、5 月にあたる復活節が日本の教会でもっている季節感（新年度・新学期）の意味、また秘跡の司牧として重要な堅信や初聖体の準備、さらにまた、世界教会的な実践として意義のある「世界召命祈願日」（復活節第 4 主日）と「世界広報の日」（復活節第 6 主日）、また教会生活で受け継がれてきた「聖母月」の信心などを、それぞれにまた全体として、現代の復活節のコンセプトに有機的に結びつけながら、キリストの神秘の豊かさに信者を交わらせていくことが典礼司牧的な大きな課題です。

典礼暦年の改定から 40 年、これまでの復活節理解とこの時期の実践を見つめ直し、新たに構想していくことが今、求められているのではないかと思います。

1) エルサレムのキュリロス「洗礼志願者のための秘義教話」大島保彦訳、『中世思想原典集成 2 盛期ギリシア教父』（平凡社、1992 年）141-170 頁参照。

2) アンブロジウス『秘跡』熊谷賢二訳（創文社、1963 年）参照。

3) 聖ヨハネ・クリュストモス『洗礼志願者のためのカテケシス』家入敏光訳（サンパウロ、2000 年）参照。

4) O・カーゼル『秘儀と秘義—古代の儀礼とキリスト教の典礼』小柳義夫訳（みすず書房、1975 年）109 頁参照。